

中国からの帰国者のための

看・听・学

— はじめての日本語 —

指導に当たる方へ

文 化 庁

この教材の使い方は、学習者が録音を聞けば分かります。
指導者はまずテープレコーダーの操作を教えてください。

は　じ　め　に

昭和47年に日中国交が正常化されて以来、いわゆる中国残留日本人孤児といわれる方々が数多く帰国してこられるようになりました。この帰国者の方々の円滑な生活適応が言葉の面からも妨げられている実情が関係各方面から指摘され、早急に適切な日本語教材を開発する必要があるとの要望が高まってきました。

このような要望にこたえるため、文化庁では、昭和57年度以降「生活日本語」、「生活日本語Ⅱ」及びこれらの「指導参考資料」を作成し、帰国者及び帰国者に日本語を指導している方々に配布してきましたが、幸いこれらの日本語教材は、帰国者に日本語を指導している各都道府県、ボランティア団体等において広く活用されております。

しかし、帰国者の中には、様々な事情で学校教育を受けていなかったり、高齢であるなどの理由から、これらの教材でも難しいという方々がおられるとの声が聞かれます。

そこで、昭和61年度は、中国引揚者日本語教材編集委員会を設けて、これらの方々のために、より平易で親しみやすい教材「看・听・学　はじめての日本語」を作成することとしました。

この教材は、日本語や日本社会に対する抵抗感を和らげ楽しく学習ができるよう工夫してあります。また、「指導に当たる方へ」では、このような方々を指導する場合の要点などを示しました。

この教材を有効に活用され、中国から帰国された方々が、一日も早く必要な日本語を習得され、日本での生活に円滑に適応されることを心から願う次第です。

最後に、この教材の作成のために休日も返上して尽力された編集委員会の委員の方々の熱意に深く感謝を申し上げますとともに、御協力をいただいた関係の方々にお礼を申し上げます。

昭和62年3月

文化庁文化部国語課

目 次

〔1〕 教える前に	1
1 この教材の対象者	1
2 この教材の特色	2
3 構成と使い方	4
4 指導に当たって	7
〔2〕 各課の内容	11
茶色の課	11
黄色の課	13
赤 の 課	15
緑 の 課	17
ピンクの課	19
青 の 課	22
紫 の 課	24
単語総合練習（白）	28
〔3〕 この教材を日本語教室等で使う場合	29

〔1〕教える前に

1 この教材の対象者

この教材は、中国帰国者のうち、日本語の学習に恐怖感をもち、拒絶反応を示すような人たち、あるいは学習をしていてもなかなか言葉が覚えられない人たちのために作られたものです。

このような学習者に対して、日本語の指導に当たる者は、しばしば学習意欲がないとか学習適性が低いとか決めつけて、さじを投げてしまうことがあります。しかし、この人たちの中国での生活や日本に帰って来るまでの背景を調べてみれば、この人たちが日本語の学習に困難を感じるものがむしろ当たり前であることが分かるはずです。

(1) この教材の対象となる人たち

ある学校で勉強していた中国帰国者に、次のような人がいました。この人は4か月間集中的な日本語の指導を受けたのですが、先生たちの懸命の努力にもかかわらず、4か月たって覚えられた日本語は、わずか十ばかりの食物や野菜の名前と二三のあいさつの言葉だけでした。

この人は、帰国者の配偶者（女性、45歳）で、中国語で読める漢字がごくわずかしかなかった。中国でも学校に行ったことがなく、鉛筆もほとんど握ったことがなかったといえます。彼女は、日本語の勉強を始めたころ、しきりに先生に「私は学校へ行ったことがない」と訴えていました。中国では、小さいときから家事に専従し、外出が嫌いでほとんど家を出なかったそうです。

彼女には、時計で時間を知る必要がほとんどなかったようで、時計を読むことができませんでしたし、地図を読むこともできませんでした。例えば、中国の自分の住んでいた家の回りを断片的に話すことができて、それを地図の形に抽象化する能力は身に付いていなかったのです。また、計算能力についても、かけ算、例えば、60円切手を3枚買ったらいくら払えばよいかという計算には非常に時間がかかりました。

このような能力の欠除は、けっして彼女自身の責任ではありません。まさしく、環境の問題なのです。学校にも行かず、新聞や本を読んだりする必要がなければ、中国語が読めなくても仕方ないことでしょう。

このような生活をしていた人が急に日本へ来ることになったのです。そこでは、日本語という外国語を勉強しなければなりません。おそらく、彼女には「外国語」というものの存在の意識すらなかったにちがいません。また、学校へ行ったことのない彼女には「勉強」に対する感覚的な恐れもあったでしょう。このような背景の彼女が4か月の日本語の勉強で、わずかの単語しか覚えられなかったのも無理はないことなのです。

この教材は、主としてこのような人たちを対象として作成されています。

2 この教材の特色

彼女は帰国後約1年たっても話すほうはまだまだですが、聞いて分かる日本語も多くなり、現在ではようやく日本の生活にもなじんできています。帰国直後は、毎日のように泣いていた彼女が日本語や日本の生活に溶け込みはじめたのには、いくつかのきっかけがありました。

まず最初のきっかけは、彼女の身の回りに同じ帰国者で面倒見のよい女性がいて、なぐさめたり、しかったりしながら、彼女を引っばっていつてくれたことです。この女性の存在は、彼女の日本語や日本の生活に対する恐れを取り除くのに大きな力になりました。

また、日本語の学習が進みはじめたきっかけは、日本語のクラスのなかでの勉強としてではなく、彼女の日常の生活のなかで自然に覚えた単語がいくつかあったことにありました。その単語のひとつは、当時ひんぱんにテレビのコマーシャルで流れていたあるインスタント・ラーメンの商品名でした。彼女がこの単語を自然に覚えたのは、コマーシャルでひんぱんに聞いたということのほか、それが彼女の耳になじみやすいメロディーとリズムを伴って流されていたということにあるようです。

もう一つ、彼女が自然に覚えた単語は、「上手」でした。これは日本語の「上手」の発音と中国語の餃子「ジャオズ」との類似性が記憶のヒントになっていたようです。これらの単語を覚えたことがきっかけとなって、彼女は日本語学習にだんだん積極的に参加するようになりました。わずかの単語でも、それを覚えられたことが彼女の勉強に対する自信となって表れたのです。

また、あいさつの言葉は、学校のなかで先生たちや事務の人たちが彼女と会うたびに声を掛けていたことから覚えられたものです。決して、教室のなかでの抽象的な練習の結果として覚えたものではないのです。言い換えれば、これらの言葉は、彼女にとって実生活での行動と結び付いていたからこそ覚えられたのだと言えるでしょう。

以上のような事例を考慮にいれて、この教材では、まず彼女のような日本語学習の困難な人たちに日本語に対する恐れを捨ててもらふことを最終的な目標と考えました。この人たちにとっては、日本語を学習する前にまず日本語に対して心を開いてもらうことが重要です。心を閉ざしている人たちにいくら日本語の勉強を強いても受け入れられるものではありません。

このような目標を持つものとして、この教材は次のような点に特に注意を払ってあります。

ア この教材は、逆説的な言い方になりますが、決して日本語を勉強させるための教材ではありません。むしろ、日本語になじむための、日本語を楽しく聞いてもらうための材料なのです。

そのために、この教材ではテープに吹き込まれている日本語を繰り返して発話させるなどの帰国者にとって、気持ちの上で負担になる「勉強」的なことはいっさいしていません。

イ この教材は、主として帰国直後の林さん夫妻と、帰国後3年で日本語がある程度できるようになった帰国者の先輩との会話から成り立っています。これは、帰国直後の人たちの不安を取り除き、心を開いてもらうための仲介者として、先輩の力が大きいという、先ほどの事例に倣ったものです。

ウ 日本語に対して心を開くためのきっかけとして、言葉を自然に覚えて、自信をつけることが非常に重要です。この教材では、そのためのヒント、あるいは記憶を助けるための手掛かりと

して、ここでもその事例を参考に、中国語との類似性、音楽との結び付き、行動との結び付きなどを積極的に取り入れてあります。

ただし、言葉を覚えることも、決して強制的にさせるものではありません。あくまでもこの教材テープを繰り返して聞いているうちに自然に覚えられるように配慮してあります。

3 構成と使い方

(1) 全体の構成

この教材は全部で七つの課と単語総合練習から成っています。各課は色で識別できるようになっていて、茶色、黄色、赤、緑、ピンク、青、紫の各色が割り当てられています。単語総合練習の部分は白です。ですから色は合計8色あります。

例えば青の課を勉強する時は、青い緑どりのある絵カード(3枚あります)を見ながら、青いラベルのテープを開きます。他の色の絵カードやテープは必要ありません。

各課を色で分けてあるのは、学習者に一目で分かるようにするためと、基本的にこの教材はどの色の課から始めてもかまわないからです。第1課、第2課といった順番はありません。たまたま赤が好きなので赤から始めてみるということでもかまわないわけです。

各課の標題とカードの構成は次のとおりです。テープは各課、単語総合練習すべてテープの片面(面ごとに色が違います)のみを開けばよいようになっています。

- ・茶色の課「どこですか」— 絵カード4枚で、茶色の緑どりのある方が表、緑どりのない方が裏です。表にはテープ本文の内容に対応した絵があり、裏はその課の単語練習が出てくる物の写真や絵が並んでいます。

4枚の表には各々1, 2, 3, 4とアラビア数字で番号がふってあります。茶色1のカード、茶色2のカードというふうに名前を付けてあります。裏には番号はふってありません。

- ・黄色の課「いいですか・どうぞ」— 絵カード4枚で、表裏の見分け方、番号などは茶色のところで説明したのと同じです。以下青の課までこれは変わりません。

- ・赤の課「お願いします・ありがとう」— 絵カード4枚。

- ・緑の課「おいしいですね」— 絵カード4枚。

- ・ピンクの課「いくらですか」— 絵カード4枚。

- ・青の課「どうぞ・どうも」— 絵カード3枚。

- ・紫の課— 絵カードは2枚ですが、表と裏両方に紫の緑どりがしてあり、1枚は表に1、裏に2、もう一枚は表に3、裏に4と番号がふってあります。つまり紫1のカードをひっくり返すと紫2のカードになるわけです。内容は、

紫1 — 数の数え方(1~10)

紫2 — 曜日の言い方

紫3 — あいさつ

紫4 — 「おとうさん・おかあさん・主人です・家内です」

となっています。他の色の課と違って練習の部分ははありません。

- ・白(単語総合練習)— 絵カード1枚で、表には、青と黄色と赤の緑どりの箱が各々一つずつ合計三つの箱があります。裏には、同様に、茶色、緑、ピンクの三つの箱があります。箱の中には、各々の課でその名称を学習した物の写真や絵が入っています。

(2) 各課の構成

紫と白を除いた残りの色の課は、全部同じ構成になっています。まずその共通部分について説明します。

各課とも話はドラマ形式で進行します。登場人物は、

- ・主人公、林夫妻：中国東北部から帰国したばかりで、日本語がまだできない夫婦ですが、もちまへの楽天性と頑張りで日本の生活に慣れ、日本語を少しずつ覚えていきます。
- ・王夫妻：三年前にやはり中国から帰国した王夫妻は、帰国したての林さん夫婦のよき相談相手となっていていろいろ面倒を見てあげます。王夫妻はもう日本の生活にも慣れ、日本語もかなりできるようになっています。特に夫の王さんは林さん夫婦にとっては日本語の先生です。
- ・田中夫妻：王さん夫婦の身元引受人で、日本人の夫婦です。中国語はほとんどできません。林さん夫婦も王さんを通じて田中夫妻と知り合います。
- ・佐藤夫人：王さんの知人で、ボランティアで帰国者の面倒を見ている日本人婦人です。中国語ができます。

の7人です。

これは主人公の林夫妻が、王さんや佐藤さんに助けられて、生活の中で日本語に対して疑問をもったり失敗したりしながら少しずつ覚えていく過程を教材化したものです。会話やナレーションは基本的に中国語（東北方言）です。

さて各課は次の四つの部分からなっています。

- ① 導入：林夫妻が、日常生活の中ではじめてある場面に出会い、そこで新しい日本語に出会ってとまどいます。王さんの解説で場面やそこで使われる日本語の意味を知り、様々な方法（歌や、中国語とのごろ合わせ、連想など）でその日本語を覚えようとします。ここでは、その課で目標とする表現の意味を導入することと、学習への動機付けをするのが目的です。中国語のナレーションが最初と最後等に入って学習者に見るべき絵カードを指示したり、状況を説明したりします。
- ② 練習1：導入で出てきた表現を、林さん夫婦が二人だけで練習してみようとします。場所は林さん夫婦の住まいの居間兼食堂で、その場にある物をいろいろ使って練習してみます。ここでは自分たちで自主的に練習することの習慣付け、その方法の示唆が目的です。ここでもナレーションが状況説明を加えます。
- ③ 練習2：林さん夫婦は、自分たちだけの練習で多少の自信をつけたので、それを王さんと練習してみたり、実際の場面を使ってみたいとします。ここでは練習の展開を示唆することと、導入と練習1で身につけたことを確認することが主な目的です。
ここではナレーションは単に状況説明をするだけでなく、王さんと林さん夫婦の会話を適宜止めながら、学習者に直接話し掛け、林さんたちの練習に加わるように誘ったり質問したりします。学習者が自主的にその誘いや質問に反応するようにであれば成功です。

- ④ 単語練習：林さん、あるいは林夫人が佐藤さんと、導入～練習2までに出てきた単語をもう一度使ってみたり、関連する新しい単語を佐藤さんに教えてもらったりします。ここでは身近な単語を覚えることで言葉の世界を広げることが目的です。単語練習では、その課で使った絵カードを全部裏返して並べて見ていきます。

最後に紫の課と、白の単語総合練習について説明します。この二つには上記①～④の構成はありません。

先ず紫の課ですが、含まれている四つの項目は各々幾つかの表現や単語のまとまりになっていて、基本的にはそれが皆歌になっています。練習はありませんが、何回も聞くことによって自然にまとまりとして覚えてほしいものが入っています。

白の単語総合練習では、ナレーターが各々の色の箱の中にある絵や写真について学習者に直接問い掛け、各課で覚えた単語を思い出させるようにします。日本人の模範発音も入っています。

4 指導に当たって

この教材の主な対象者は、「この教材の対象者」にも書いたように「日本語の勉強」と言っただけで頭が痛くなってしまような人たちです。この教材での学習を通じて、その人たちがもっている日本語や日本社会への恐怖感を和らげ、日本語が少しでもできる先輩や身近な人の助けを借りながらでも自分で何かができるという気持ちになってもらえれば、この教材の大きな目的はかなえられることになります。

そのために、各課で何をどう指導するかは「〔2〕各課の内容」に詳しいですが、ここでは指導者の方々にこの教材の作成の意図を理解いただき、この教材に盛られていない学習項目の指導に広げていくときに考慮すべき事柄などについて簡単に触れます。

(1) 学習者と一緒に見て聞いてみる段階

この教材は基本的には自習ができるようになっています。カードの絵や写真を見ながら録音テープを聞くだけでも楽しく勉強できるはずです。

しかしこの教材の対象者にとって、テープに合ったカードをそろえたり、ナレーションの指示に従って絵や写真を目で追いつながりながら聞くという作業は難しいと思います。これがスムーズに行えるようになるには幾らか時間が必要かも知れません。まず指導者は、学習者と一緒にカードを並べ、テープを聞いてください。絵が移ったり、学習内容が替わったりするところで適宜テープを止めるなどして、学習者が勉強しやすいカードとテープレコーダーの使い方を示してください。

カードを並べたりテープレコーダーの操作に慣れてこそ、この教材で楽しく勉強できるので。この時点では、指導者は学習者と一緒にただカードを見ながらテープを聞くことに徹してください。これはどの段階にでも言えることですが、各課の「日本語を覚える歌」などについても覚えることを強制したり、歌うことを要求したりしないで、覚えなければ覚え、歌いたければ歌うということだけで十分です。

(2) 学習者と一緒に行動してみる段階

ある課について学習者がカードを見てテープを楽しく聞けたようだったら、次の段階の指導に移ります。指導者は多少中国語を使うことになります。もし指導者が中国語を解さない場合は下の(4)を参照の上、帰国者の先輩など中国語のできる人と組んで指導してください。

この段階で配慮したいことは指導者が「日本語の勉強」といった面を強調しないことです。指導者は学習者と一緒に行動し、学習者がその行動ができたときに「日本語ができた(分かった)」ことも併せて評価するという方法を取ってください。

そのためには、その課の学習内容(行動目標)を学習者に合った範囲と方法により、実際の行動を通じて再現するとよいでしょう。つまり「勉強」といった雰囲気を取りはらって、だれかの家を訪ねたり、電車やバスに乗ったり、買物をしたりしながら指導者が王さん役になり適宜手助けをします。このとき、手助けはしても学習者が自分で何かができたと思えるように指導することが大切です。

ところで、多くの課では林夫妻だけで、覚えた日本語を使う練習をする場面(練習1)があ

ります。これは、帰国者が家族を相手にして練習できるということのヒントです。これに倣ってやってみようという気持ちになってもらえればよいのです。帰国者が家庭内でも無理に日本語を使うべきだというものではありません。

むしろ、家庭内では自分の母語である中国語を使って自然な対話することは、日本社会という異文化の社会での生活でたまっているフラストレーションのはけ口にもなり、大切だと言われます。特に子供がいる家庭では、親子の意志疎通を保つためにも子供に中国語を残す必要性は高いと思われます。

(3) この教材からの発展を目指す段階

次は、この教材から更にほかの学習項目に広げていく段階になりますが、それには二通りの方法があると思われます。

その一つは、各課の学習内容に関連した項目を追加していくものです。これらの方法については各課の「発展へのヒント」を参照してください。

もう一つは、この教材では扱っていないが帰国者の日常生活に必要な行動力をつけるための学習項目の導入です。例えば家族のだれかに電話が掛ってきたが、その者が外出中だったときどうするか、家族や急病人やけが人が出たときにどうするかなどです。

これらについては「生活日本語」でも扱っていますが、それをそのまま指導することは本教材の対象者にとっては難しい面もあると思います。学習者にあまり負担にならないで目的を達成できるように指導を工夫してください。前者については受話器の取り方を実際にやってみたり、「すみません。日本語分かりません。～時、お願いします。」と言う指導などが考えられます。後者についても、赤い緊急カード（「助けてください。すぐ来てください。」など大きく書いて、緊急連絡先などを書き添えたもの）を用意しておき、それを示しながら、「お願いします。」と相手に訴えかける練習などができるでしょう。

このような練習での指導者の役割も、本教材の中での王さんの役割を参考にするとよいと思います。

この教材の中での王さんの指導方針は主に次の三つです。

ア 王さんは、林さんに対し日本語を使うことを強制していません。日本語を聞かせて林さんが自発的に使いたくなるような環境を作ることに専念しています。

イ 王さんは、いつも林さんと一緒になって楽しく勉強する。

ウ 王さんは、林さんと行動をすることを大切にしています。日本語について説明すること、その行動の中で林さんが知りたいものについてその都度行っています。

指導者の皆さんが新しい学習項目を指導するに当たっても、この王さんの指導方針は大切だと思います。

(4) 中国語に自信がない場合、指導者は

この教材の対象者に指導する場合、指導者は少しでもよいから中国語を使いたいものです。

指導者が中国語を話すことで、学習者の日本語を勉強することに対する心理的な圧迫感を和らげることができます。たとえ指導者の中国語が上手でなくても、母語以外の言葉で意志を通

じさせようとすることは学習者の日本語学習の意欲にも反映するでしょう。

しかし、指導者は中国語ができなければ何も指導できないというものではありません。中国語ができる指導者と組んだり、中国語ができる人をアシスタントにしたりして指導してください。このときの方法について次に例を示します。

ア まずこの解説書の「〔2〕各課の内容」を読んで何をどんな方法で学習するものかを確認してください。

イ 次に、この項の(1)で述べたことを指導してください。カードを見ながらテープが聞ければ、学習者は各課で勉強する内容については理解できるはずです。

ウ 次に学習者が学習内容に沿って表現や単語の練習をするときの手助け役をしてください。

エ さらに、各課の内容に沿って実際の行動(実習など)を通じて指導する場合の補助役をしてください。このとき、実際の場面で学習者が覚えたいと思っているような単語や表現がありそうだったら、それを感じ取って教えてあげてください。ただし、指導者がこの場面ではこの言葉が大切だと、ある表現を示し、強制的に覚えることを要求してはよくありません。

次に、上のウの単語の練習(白いテープの「単語総合練習」についても言えることですが)について指導上の要点を示します。

このテープの中では、林夫妻や王夫妻という帰国者等が日本語を話しています。日本語としてはおかしい発音も出てきます。また、「日本語を覚える歌」は、学習者のなじみやすい中国風のメロディーで、日本語のイントネーションと合わない部分もあると思います。これらを普通の日本語(学習者が生活する地方の言葉でよいわけですが)の言い方に直して示すことも重要です。そのために、学習項目の日本語のやり取りや単語の部分についての普通の日本語で録音して、学習者に聞かせるなどの方法も有効でしょう。

また、該当課のカードの裏の絵や写真を使って一緒にテープを聞きながら勉強する場合のことですが、日本語の単語が出てくるたびに、例えば「ほら、これがたばこでしょう。」とか、「ああ、これが中国のお菓子ね。」とか自然に学習者に語りかけてください。

これは母親が赤ちゃんに対してやっていることと同じです。赤ちゃんが言葉が分かろうが分かるまいが、特定の場面や状況で、話しかけることが大切なのです。言葉の勉強は折りに触れ多くの言葉を聞くことから始まります。その言葉の意義はその言葉を聞いたときの場面・状況が伝えてくれます。このことは、日本語教育についても言えることです。指導者は場面や状況を上手に工夫して、単語の勉強が単調にならないように常に学習者の興味を引き付けながら自然な言葉を聞かせるようにしてください。

そのためには、カードを使うだけでなく身の回りにある実物を使うとよいでしょう。例えば、「ビール」ならいろいろな種類のビールを用意して、「林さんは、どんなビールが好き?」「びんのビール? 缶ビール? ほら、これびんのビールね。こっちが缶ビールね。」とか、「中国にも缶ビールあるの?」「それじゃあ、これは? たるのビール。」と、「ビール」という語を多く聞かせるようにします。また、学習者がこれらに反応して指をさしたり、「これ」

と示したりしたら、「ああ、びんのビールが好きなの。」とまた聞かせることを繰り返します。さらに、学習者と一緒に酒屋に行って「ビールください。ええと、びんのビール2本と缶ビール1本。缶ビールは500ccのね。」と言って買うときの言葉を聞かせたり、自動販売機のとこで、「どのビールを買おうかなあ。」とか、「缶ビールにしようかなあ。」とか、ここでも「ビール」という言葉を聞かせる工夫をしてください。

(5) この教材をその他の学習者に用いる場合

この教材が対象とする主な学習者については、「この教材の対象者」の部分で述べたとおりですが、それ以外の学習適正が比較的高い者に対しても利用できます。ここでは、帰国して間もない方々が受け入れ側の身近な人と一緒に学ぶような場合について述べます。これらの帰国者用の教材としては「生活日本語」などがあります。つまり、日本語をより多く用いながら日本社会での行動力をつけていくことができる学習者です。

しかし、このような学習者であっても、日本語をまったく学習していない場合、日本語に対する不安は大きいものです。そのような学習者の入門の前段階にこの教材は役に立つと思われます。

その場合、帰国者を受け入れた身近な方々がこの「指導に当たる方へ」を参考にして自習の手助けに当たってください。学習者がいろいろな表現に興味を持つようだったら反応に注意しながら適宜指導項目を増やしてください。

〔 2 〕 各課の内容

茶色の課 「どこですか」

ここでは、茶色のラベルのテープと茶色の1から4、計4枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

帰国した人たちは、日本の生活が長くなるに従って、外出の機会が増えるでしょう。その際、特に日本語を口にしながら、目的地へ行ったり、交通機関を利用したり、買い物をしたりすることは可能かもしれません。

しかし、だからといって人とのコミュニケーションを避けて無言で行動していたのでは、日本の生活に溶け込めません。積極的に言葉を使い、日本人との対話を通して生活になじんで行くことこそ重要です。

そのためのきっかけとして、「どこですか」のような表現が役に立ちます。「どこですか」への答えとして返ってくるであろう日本語は、常に学習者に理解できるものとは限りませんが、指さしや、身振り等で学習者と日本人が何とかコミュニケーションしようとすることに生活的・学習的意義があると言えます。

この課では、コミュニケーションの機会を広げるための言葉として、相手の注意を喚起する「すみません（すいません）。」、場所を尋ねたり、自分がそこに行きたいという意図を相手に伝える「～どこですか。」、そして相手の答を聞いて礼を述べる「どうも。」を学びます。

〔あらすじ〕

1 導入 茶色1、2のカード 登場人物：林夫妻、王さん、デパートの店員。

ある日曜日、林夫妻と王さんは、デパートへ買い物に行きます。ところが、デパートで、林さんがいなくなっていました。しばらくして戻ってきた林さんに聞くと、トイレへ行っていたといいます。しかも場所が分からなかったので歩き回って探したということでした。そこで、王さんは「トイレ、どこですか。」と尋ねる表現を林夫妻に教えます。次に、夫人もトイレに行くというので、「どこですか」を練習しながら、トイレを探します。このとき、「すみません。」と言って相手を呼び止めること、聞き取りがあまりできなくても相手が指した方向へ行けばよいこと、「どうも」と礼を言うことも王さんが二人に教えます。

トイレの後、林夫人はメガネ売場を「どこですか」を使って店員に尋ねます。ところが、今度は、店員の答えがまったく理解できませんでした。そこで王さんは「日本語分かりません。」と、聞き取れなかったことを伝えます。すると店員は3人をメガネ売場まで案内してくれます。

2 練習1 茶色3のカード 登場人物：林夫妻。

林さんが絵地図をもらって、家へ帰ってきます。林さんと夫人は絵地図を見て、「どこですか」の復習をします。絵地図を見ながら、交互に「～どこですか。」と地図にある店や駅などの場所

を尋ね、尋ねられた方はその場所を指でさすという練習をします。「どこですか」は日本語で、その他は中国語で、駅・スーパー・パン屋・洋服屋・パチンコ屋と続けていきます。

3 練習2 茶色4のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

林夫妻は王さんの友人の中村さん宅を訪問するため、王さんと待ち合わせをします。

林夫妻は、まず、駅前で王さんとの待ち合わせの場所の郵便局を探します。「どこですか」を使って通行人に尋ね、郵便局でうまく王さんに会えます。次に、訪問する前に確認の電話を入れようという王さんの提案に従って、公衆電話を探します。電話をした後、てみやげの果物を買うためにスーパーを探します。スーパーで果物を買うと、今度は林さんがトイレに行きたいと言いだし、トイレを探すことになります。

最後に、バス停を尋ねます。ところが、どこ行きのバスかを日本語で説明することは王さんにもできません。それで、王さんは「日本語、分かりません。」と言って、中村さんの住所を書いた紙を通行人に見せるという手段を取ります。それでバス停の場所も分かって、3人はバス停へと急ぎます。

4 単語練習 茶色1～4のカードの裏 登場人物：林さん、佐藤さん。

林さんは佐藤さんに駅、バス停、スーパー、郵便局、ポスト、トイレ、便所、公衆電話の八つの単語について教わります。林さんは、駅、郵便局、スーパー、トイレの四つについてはなんとか覚えました。

〔発展へのヒント〕

第三者とのやり取りの中で、相手の示してくれた答えを聞いて理解することは、日本語学習を始めたばかりの学習者にとって、非常に困難だと思われます。ですから、いわゆる言葉を耳で聞き取ること以外に、相手の表情や動作を観察することによって、自分に必要な情報を取ることが重要です。例えば、「トイレどこですか。」と尋ねて、「ここをまっすぐ行った突き当たりです。」と答えが返ってきたとき、「まっすぐ」も「つきあたり」も知らない言葉だったとしても、相手が視線を送ったり指をさしたりした方向を見て取って、トイレがそちらにあると推測することが必要です。方向や位置を表す言葉が不足していても、日本語の聞き取りが難しくても、このやり方を知っていれば、日本人に「～どこですか。」と尋ねることができます。こうした自信を学習者に持たせることが大切です。決して「言葉を知らないから何もできない。」と悲観させないようにしてください。

「日本語分かりません。」の使い方を覚えることも大切です。

「日本語分かりません。」と言われたときの日本人の反応は様々でしょう。この課で見るように、言葉による説明をあきらめて、実際行動に移してくれるケースもあるでしょうし、言い換えたりゆっくり言ってみたりして、軌道修正を図るケースもあるでしょう。途中で会話を放棄するケースも考えられます。いずれにしろ、この表現は「非常手段」で、これを使えば、会話の流れが途切れてしまうことを説明し、むやみに使わないように注意したいところです。

しかし、以上のようなやり方だけをいくら示してやっても、学習者がやり方どおりできるようになるわけではありません。覚えた言葉を使うと行動が達成できることを実際に体験させてや

る必要があります。それも、もしできれば、教室などの模擬場面ではなく、現実の場面で体験させてやりたいところです。具体的には、路上や公園やデパート等で「どこですか。」を使ってトイレその他の場所を一般の日本人に尋ねます。そして、返ってくる答えを聞いて理解する練習をします。その際、「練習2」で王さんがしたように、「すみません」と呼び止めるのを助けてやるなど、学習者のレベルを考えて、いろいろな援助をしてやらなくてはなりません。日本にも日本人にも不慣れな学習者には大変な練習かもしれませんが、うまく日本語を使うことに成功し、尋ねた場所が分かったなら、学習者にとって大きな自信になるでしょう。

また、「練習1」のように、地図を使って「どこですか」の練習をするような場合、どんな地図を使うかが大きな問題になってきます。絵地図を使うのがいいと思われます。なるべくならきれいで、見て楽しいもののがいいでしょう。一般の平面図では位置関係が分かりにくく、「どこですか」の練習をする以前の問題でつまづいてしまいます。2次元の平面図から3次元の空間を思い浮かべたり、平面図の位置関係を読み取ったりすることは、地図に不慣れな人にとって、私たちの想像以上に難しいことなのです。

その他、できれば、トイレの表示の見方、分からないときは首をふる等の言葉以外の要素にも着目させてみましょう。中国と比較してみるのもいいでしょう。

また、他の人の家を訪問する際のマナーについても学習者と一緒に話し合ってみましょう。この課の「練習2」では、たとえ約束してあってももう一度確認のため電話をしたり、てみやげを持っていったりとかなり細かい配慮が示されていますが、これに限らず、もっと一般的なことからについても話し合ってみてください。こうしたマナーについて中国と日本を比較するのは、決して日本の文化を押し付けるためではなく、二つの文化の違いに気付かせるためです。日本式のやり方を「紹介する」つもりでいいと思われます。

黄色の課 「いいですか」「どうぞ」

ここでは、黄色のラベルのテープと、黄色1～4、計4枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

帰国者の行動の中には日本社会では奇異に感じられるものがあります。また逆に、一般の日本人の行動の中にも帰国者の目から見れば奇妙に思われるものがあるはずです。このような違いは社会習慣をも含めた、いわゆる文化の違いによっています。この行動の違いによってしばしばトラブルが生じることがあります。日本社会の常識では、当然一言断ってから行動するべきときに、帰国者が無断で行ってしまうことがあると言われますが、これはこうした文化的な違いの一つの現れだと考えられます。例えば、他人のものに断りなく触ったり見たりして、相手を不愉快にしまうことがあります。このようなときに、文化の違いに気が付き、一言「いいですか。」と断れば、何も問題はないでしょう。

この課では、どんな場面で「いいですか。」を使うかを提示し、それが一般の日本人とのコミュニケーションの上で、どのような重要性を持っているかに気付かせることがねらいです。

ここでは、相手に何か許可を求めるときの表現「いいですか。」を導入するために、林さんが佐藤

さんの家の仏壇^{いはい}の位牌を触ってしまう、という場面を設けてあります。少々誇張された場面ですが、是非ここで、どうして佐藤さんが驚いたか、日本社会では好奇心にかられて触ってしまう前にどうするのが普通かを学習者に気付かせたいところです。そして、こうしたときは「いいですか。」と断ればトラブルは防げるともっていければよいでしょう。

〔 あらすじ 〕

1 導入 黄色1のカード 登場人物：林夫妻、王さん、佐藤さん。

林夫妻は王さんに伴われて、王さんの友人佐藤さんの家を訪問します。場面は、佐藤さんの家の応接室と応接室に続く部屋で、林さんが珍しいものを見付けたところから始まります。珍しいものは実は位牌で、そうとは知らず、林さんは断りもなく触ってしまいます。それを見た佐藤さんは驚いてとがめますが、林さんはとっさには自分のしたことの意味が分かりません。そこで、王さんが間に入ってとりなし、林さんは佐藤さんに謝罪してその場が収まります。次の場面は、カードの下絵のとおりバスの中です。佐藤さん宅からの帰路、林さん夫妻と王さんは佐藤さん宅であったことについて話し合い、王さんが人の物を見たり触ったりするときは、「いいですか。」と言って断るべきだということを説明します。その場合、「これを見せてもらってもいいですか」等の表現は難しいので、もっと簡単で、かつ同じ機能を果たす「これ、いいですか。」で表現してもいいとも言ひ添えます。さらに、王さんは「いいですか。」と尋ねられて「どうぞ。」と言われてからその行動を起こした方がいいと説明し、林夫妻は「いいですか。」「どうぞ。」のやり取りを歌にのせて覚えようとします。最後に、「いいですか。」を使った言い方として、自分が窓を開けてもいいかどうか尋ねるとき、「いいですか。」が使えること、「いいですか」の前に「窓」をつけて「窓、いいですか。」と言えることを紹介します。

2 練習1 黄色2のカード 登場人物：林夫妻。

今度は、導入部で理解した表現「いいですか」を林さん夫妻が二人だけで使ってみる場面です。二人で自宅ではひらがなの練習をしていたところ、林さんが夫人の消しゴムを勝手に使っています。それを林夫人がとがめ、そういった場合には相手に許可を求めるべきであると言ひます。そして許可を求める表現「いいですか」を歌によって思い出します。二人は「いいですか。」を使って、相手の手元にあるものを取ってもらったり見せてもらったりする練習をします。最後に林さんが夫人の近くにあった煙草を取ってもらって、「いいですか。」と喫煙に対する許可を求め、夫人がしぶしぶ「どうぞ。」と言って終わります。

3 練習2 黄色3、4のカード 登場人物：林夫妻、王さん、佐藤さん、その他。

林夫妻と王さんは再び佐藤さん宅を訪問します。

佐藤さん宅に着くまでに三つの場面に出くわします。いずれも「いいですか」「どうぞ」が使われる場面です。

- ① 公衆電話を使いたい人が、電話の前に立っている人に、電話を使いたい旨申し出る。
- ② 駅の券売機の前で、まどついているおばあさんに、切符を早く買いたい人が、断って先に買う。

③ 電車の中で、空いた席の前に立っている人に、「いいですか。」と断って座る。

佐藤さん宅に着くと、今度は佐藤さん宅で練習が始まります。佐藤さん宅の電話を使いたいとき、新しいカメラを見せてもらいたいとき、テレビをつけたいとき、窓を開けたいとき、それぞれについて「いいですか。」を用いて練習します。

4 単語練習 黄色1～4のカードの裏 登場人物：林さん、佐藤さん。

林さんが佐藤さんにいくつかの物の名前を教えてもらっています。ここでは、佐藤さんから、「電話」、「公衆電話」、「たばこ」、「ライター」、「窓」、「窓口」、「カメラ」の七つについて教わります。

例えば、電話にはいろいろな種類のものであっても、総称として「電話」と言っていることや、たばこの自動販売機のことなどです。

林さんは七つの中でも、「電話」、「たばこ」、「窓」、「カメラ」の四つについては、なんとか覚えられそうです。

〔発展へのヒント〕

相手の手元にあるものを自分が取りたいとき、「いいですか。」と断って取る、という設定で練習してみましょう。カードに載っているもの以外にもいろいろな文房具などを用意して、相手側にあるものを断ってから取る練習をしてもいいでしょう。このとき、文房具名は中国語でもいいのですが、学習者が知りたがれば、日本語で導入してもかまいません。この場合、日本語の単語を無理に覚えさせることはありません。あくまでも断りの行動を伴う「いいですか。」に重きを置きたいところです。

この他、指導者が学習者と一緒に食事をするときなど、「いいですか。」と断って調味料や料理を取ってみるのもいいでしょう。

日常の場面で「いいですか。」が、どうしてそこで「いいですか。」と断らなければならないか話し合い、場面の理解度を確かめるのもいいでしょう。その他、どうしても場面が理解できなかったり、「いいですか。」の意味の定着があいまいであったりするときは、急がず、もう一度「導入」や「練習1」を繰り返し復習するのがいいと思われます。

赤の課 「お願いします」「ありがとう」

ここでは、赤いラベルのテープと、赤1～4、計4枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

導入の部分で、道に迷った林夫妻が緊急カードを見せて助けを求める場面がありますが、緊急の場合このように助けを求める手段をもつことは帰国したばかりの人たちには場合によっては生命にかかわるほど重要です。必ずこうしたカードを所持してもらって、その使い方を知ってほしいと思います。この課に出てくる表現は、カードを見せる時にも使える表現ですが、日本語の表現が使えなくても身振りによってでも、とにかくカードが使えるように指導してください。

この課のもう一つのねらいは、人の注意を引く時の「すみません」、ものを頼む時の「お願いします」

す」,そしてお礼の「ありがとう」という表現です。日本の生活に慣れないうちは、どうしても他人の世話になることが多いはずで。人から一方的に世話をされることは人によっては負担になることです。ここでの表現に自信が持てれば、自分の責任において必要なことを人に頼み、大人として対等の関係を取り結んでいくことのきっかけになるでしょう。

緊急カード（例）

（表）

ご協力お願いします。

東京都千代田区霞が関3-2-2

（電話） 581-4211

王 振 興

（裏）

この人は、中国から帰ってきたばかりで、今日本語の勉強をしています。まだよく日本語が話せません。

このカードを見せられた方は、警察に連絡するか表の連絡先に連絡して下さい。

〔あらすじ〕

1 導入 赤1のカード 登場人物：林夫妻、王さん、その他。

買物に出た帰り、林夫妻は道に迷ってしまいます。困り果てたすえ、王さんに緊急カードを書いてもらっていたのを思い出します。緊急カードの連絡先は王さんの電話番号になっています。いざ、そのカードを使ってみようということになった時、王さんから次のことを言われていたのを二人は思い出します。①日本人にカードを見せる時、「お願いします」と言う。これは物を頼むときの決まり文句。②頼んで何かしてもらったら「ありがとう」と言う。それに、「お願いします・ありがとう」を歌にして覚えたことも思い出します。二人は実際にカードを差し出して通行人を呼び止めようとしますが、何人かはソッポを向いて通り過ぎます。二人は日本人は不親切だと腹を立てますが、ついに一人の通行人がカードを読んで王さんに電話してくれます。王さんが迎えに来てくれることになり、二人は通行人に「ありがとう」を言って別れます。

2 練習1 赤2のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

自宅に戻った林夫妻。食事中に林さんがしょう油を取ってくれと夫人に頼みます。するとそれは日本語で言えるのではないかということになり練習が始まります。互いに交代でいろいろなもの（しょう油、塩など）を取ってもらい合ったり、お茶やビールを出し合ったりします。

3 練習2 赤3と赤4のカード 登場人物：林夫妻、王さん、その他。

(1) 赤3のカード。中華料理の食堂で、林夫妻と王さんはちょうど食事を終えたところです。林さんはお茶が欲しくなります。（頼む時に何と言えいいのか、ナレーションが学習者に直接問いかけます。）「すみません、お茶、お願いします。」と林さんが頼むと、今度は林夫人が水が欲しいと言います。（ここでもナレーションが学習者に何と言えいいのか問いかけます。）「すみません、水、お願いします。」と林夫人。お茶と水が来て、夫婦がウェイトレスに「ありがとう。」と言ってこの場面は終わります。

(2) 赤4のカード。三人は食堂から王さんの家へ行きます。王さん宅の玄関に入ったとき、林さんが王さんに、もう暗くなってきたから電気をつけてくれと頼みます。「すみません。電気、お願いします」。練習が始まりますが、林さんはたばこを吸い始めます。むせてしまった林夫人は林さんに窓を開けてくれるように頼みます。王さんの助けで、それは「窓、お願いします。」と言えいいことが分かります。

4 単語練習 赤1～4のカードの裏 登場人物：林夫人、佐藤さん。

カード裏の絵、写真を並べて見ながら林夫人が佐藤さんに「塩、砂糖、こしょう、しょう油、水、電気」などの単語を習います。

林夫人は、「塩」、「しょう油」、「水」、「電気」の四つは何とか覚えられました。

〔発展へのヒント〕

「すみません(すいません)。～ お願いします。」という依頼の形は、場合によっては多少不自然なこともあります。汎用性があります。「～てください」のような様々の形が使えれば便利ですが、形式としては上記の一つの形に慣れさせ、依頼に伴う遠慮や謝意などの気持ちがうまく表せるようになることが大切です。また、この表現が素直に使えるようになるためには自然な文脈の中で、何度も繰り返しこの表現を耳にすることが先ず重要です。ですから学習者に無理に表現を使わせるよりも、指導者が学習者の家で、あるいは外で学習者と一緒に行動する中で表現をどんどん使ってみせ(学習者に対してだけでなく、他の日本人などにも)、学習者に聞かせることを第一に考えてください。それによって表現の使われる自然な状況も習得されるでしょう。要は、学習者が自発的に表現を使い出すようにさせればいいのです。

緑の課 「おいしいですね」

ここでは、緑のラベルのテープと、緑1～4、計4枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

この課の導入部で林夫妻は日本人の田中さんの家で食事を一緒に取ります。帰国者にとって身内や身元引受人などの日本人と食卓をともにする機会は少なくないでしょう。こうしたとき、食事のマナーももちろん大切ですが、この課ではマナーよりはむしろ、日本人と食事をともにする際、簡単な言葉でも話題のきっかけを作れることを示しています。

日本語がまだよく話せない学習者に対して、楽しい会話をするというのは過剰な要求に聞こえるかもしれませんが、たとえ長い文で話す力がなくても、その場にふさわしい語を知っていて、それが使えれば、話し手は話題を提供したり、話題に参加したりできます。

ここでは「おいしい」が、その話題のきっかけになる言葉に当たります。「おいしい」は相手の料理を褒めるとき、日本の食べ物を評するとき、自分の好き嫌いを言うとき、そして中国の料理や食べ物を紹介するとき等に使えます。林夫妻は王さんに教えてもらった「おいしい」と幾つかの食べ物の名称で、田中さんと楽しく会話をしながら食事ができました。

食事の後、林さんの子供が話題になり写真を見ながら「おおきい」とか「ちいさい」とか言いながら楽しく会話を進めます。ここでは、写真そのものも話題を提供する小道具として登場しています。

また、ここでは単語を覚えるのに音の類似も手掛かりになることを紹介してあります。「ぎょうざ」の中国語「餃子」^{ジャオツ}の発音が日本語の「じょうず」と似ていることから、「じょうず」を覚えるのに、「餃子」を利用する方法を示しています。このような方法を工夫することによって、楽しく、気負わずに日本語に向かう姿勢を作ることが大切です。

〔あらすじ〕

1 導入 緑1のカード 登場人物：林夫妻、王さん、田中夫妻。

林夫妻は王さんと一緒に、田中家の夕食に呼ばれます。林夫人は、王さんに「おいしい」という言葉を教えてもらいます。田中夫妻は王さんに通訳をしてもらって林夫妻にいろいろ話し掛けてきます。日本の食べ物は何かが好きか、今日のメニューのぎょうざはどうかと聞かれ、林夫人は王さんに教わりながら「ごはん、おいしい。」「ぎょうざ、おいしい。」と答えます。この玉子を使った中国料理はどうか、と尋ねられて林さんはとてもじょうずだと褒めますが、王さんがそれを日本語で「じょうず」と通訳したので林夫人はそれを中国語の「ジャオズ（餃子）」に聞き違えてしまいます。そこで王さんは「じょうず」は上手という意味、「ぎょうざ」は中国のジャオズだ、と説明します。すると、林さんが日本語で「上手ですね。」と褒めたいときは中国語の「ジャオズ」と言えば通じるだろう、と言い出したので、一同は笑ってしまいます。

食事が終わり、みんなは林夫人が持ってきた写真を見ます。写真には林夫妻の二人の息子之和と正道が写っています。兄の和之をさして田中が「大きい」と言ったことから、「おおきい」が中国語の「大的」に当たることが分かり、そして小さい方の子供の正道のことを言うとき、「小的」にあたるとは、「ちいさい」を使うことが分かりました。

2 練習1 緑2のカード 登場人物：林夫妻。

林夫妻が二人で食事をしています。林さんは夫人の作ったぎょうざをおいしいと褒めます。そこで、「おいしい」は日本語で何と言うかという話になり、「ぎょうざ」と「おいしい」の練習をします。

次に林さんはみかんを食べようとして夫人に取ってもらいます。そのとき、大きいみかんを取ってほしいと言って「大きい」と「小さい」の練習が始まります。「大きいみかん」、「小さいみかん」と言えるようになってから、夫人は林さんにどちらが欲しいか尋ねます。林さんは覚えただけの言い方で「大きいみかん」と答え、大きいみかんを取ってもらうことができました。

3 練習2 緑3、4のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

王さんが林さんの家に来ました。二人は王さんを先生役に、「大きい」、「小さい」、「おいしい」の練習を始めます。王さんがものの名前を中国語で言い、林さん夫妻がそれぞれにふさわしい形容詞を三つの中から選ぶという練習です。「象」と言ったときは「大きい」と答え、「蟻」と言ったときは「小さい」と答えます。そのうちに、ものの名前とふさわしい形容詞が二つ以上あるようなものもできました。例えば、「玉子」には「大きい」、「小さい」、「おいしい」

が全部当てはまるという具合です。

そこで、王さんは今度は、「玉子」、「餃子」、「ごはん」というように、ものの名前をいくつか出して、それら全部にふさわしい形容詞を選ぶように指示します。これまでに練習した身近なものの名前を使って、三人は練習を続けました。

4 単語練習 登場人物：林さん、佐藤さん。

林さんは佐藤さんに物の名前を教えてもらっています。佐藤さんは「ぎょうざ」、「すいぎょうざ」、「ごはん」、「おかゆ」、「たまご」、「こども」の六つの言葉を教えてください。林さんは「ぎょうざ」、「ごはん」、「たまご」、「こども」の四つはなんとか覚えられました。

〔発展へのヒント〕

ここでは形容詞を正しく使って文を作ることよりも、その場面にふさわしい、話題のきっかけとなる表現として使うことが目的です。ですから、指導者が学習面から中国料理を習ったり、逆に日本の料理を教えたり、それを一緒に食べたりするなかで、「おいしい」「大きい」「小さい」などの言葉や、また自然に出てくる話題に伴う表現をたくさん聞き、言ってみたくなるようにしたいものです。食べ物以外に、「練習2」のように子供を話題にして、写真などを見せ合いながら話をしてみましょう。言葉の勉強だと思わずに楽しく会話する中で使われることによって、学習者は必ずその言葉を覚えてくれます。一緒にスーパーに買物に行き、指導者が学習者に指示して野菜や果物などをかごに取ってもらうのも良い方法です。「このトマト、小さいから、あの大きいのを、とって。」「ああ、これは大きいねえ。」などと自然に出て来る言葉を大切にしましょう。

食べ物の話は、比較的なじみやすいものです。特に、農村出身の人たちは、実際に野菜や穀物を作って生活していたこともあって、それらの身近なものが話題になりやすいことでしょう。中国の食べ物や料理を話題にして、話し合ってみましょう。例えば、餃子の作り方について話すとすると、餃子の中身の具に使う野菜が必ず話題になると思われます。そのとき、それらの野菜の名称を日本語で導入するとよいでしょう。たとえそのときは覚えられなくても、後日、他の日本人と中国の餃子について話す機会の助けになるでしょう。

ピンクの課 「いくらですか」

ここでは、ピンクのラベルのテープと、ピンク1～4、4枚のカードを使用します。

※ 紫の課の1（日本語の数の1から10の数え方）の先にやってからこの課に入るようにしてください。

〔本課のねらい〕

帰国して間もない学習者にとって、いろいろな意味で日本社会で生活していけるかどうか強い不安があります。そんな彼らにとって買物ができることは、衣食住の最低限は何とかなるという生活に対する自信にもつながります。

買物をするのに、一般の日本人と同じような日本語力がなければいけないというものではありません

ん。必要な物や量が伝えられ（スーパーなどでは物を選ぶことができ）、代金の支払いができれば何とか用は足ります。欲しい品物の細かい説明や、配達依頼など面倒なことについては身近な人に書いてもらった書付を示すなどの方法に頼ってもいいわけです。自分ができないことをできる人に頼ることは恥じることはありませんが、何とかすればできることはやってみることが大切です。「何とかする」方法のヒントを示し、「やってみる」ことに対するためらいを取り除くのが指導者の役割です。

ここでは、林さんが王さんについて、日本のお金の種類とそれぞれのお金の金額を勉強し、スーパーと八百屋で買物をしてみるという設定になっています。学習者がこのやり取りを聞いて、何とか買物ができるという気持ちになり、自分に合った方法で実際に買物をしてみるまで指導できればよいでしょう。

ところで、買物について日本と中国では考え方にちょっとした違いがあります。それは次のようなエピソードにも反映しています。

ある地方の町に定住した帰国者が小さなスーパーをしている隣の酒屋ではたまに酒類を買うだけで、ほとんどの買物は比較的安い隣のスーパーまでわざわざ自転車で買い出しに行くと言うのです。ところが、隣の酒屋の人は親切で、何事につけてこの帰国者家族の相談に乗ってあげているので年中行き来があります。帰国者家族はたまに隣町での買物の帰りに酒屋に寄って、これは安かったと買って来た品物を見せると言うのです。その中にはその酒屋で売っている物もあり、見せられた酒屋さんは苦笑しているそうです。幸いこの酒屋さんは、これも中国育ちのおおらかさだと温かく見てくれているらしいのですが。

国が違えば文化も価値観も違います。この酒屋さんのように価値観の違った文化を持った帰国者の行動を温かく見てあげるべきだとは思いますが、そうもいかない場合もあると思います。帰国者とそれを取り巻く回りの人たちの間に不必要なトラブルを生まないためにも、指導者は、買物に関連して注意すべき日本社会での行動様式、価値観等についても教えないものです。その際、日本に住むかぎり日本社会の考え方が絶対だというような押し付けは逆効果になることは言うまでもありません。

〔あらすじ〕

1 導入 ピンク1, 2のカード 登場人物：林夫妻、王、その他。

林さんの家に王さんが遊びに来ています。林さんは先日王さんに教えてもらった日本語の数の言い方を完全に覚えたことを自慢します。（※紫の課の1の学習内容を参照ください。）ところが、林さんが覚えたのは1から10までで、これだけでは日本では買物の金額も言えないことを知らされます。

王さんが、実際のお金を並べて教えたので、林夫妻は日本のお金の種類とその金額について大体覚えることができました（ピンク1のカード）。ただ林さんは、それを日本語で言うことはまだよくできません。しかし、王さんに日本語で言えなくてもお札と硬貨の種類さえ分かれば、買物ができると言われ自信を持ちます。

そこで、王さんは、林さんを連れてスーパーと八百屋で実際の買物をしてみることにします。

スーパーでは、言葉が分からなくても、レジの表示金額を見れば払う金額が分かることを教わります。次に、八百屋に行って「これ」と必要な物を指さして必要な量が伝えられればよく、「幾らですか。」「書いてください。」と言って金額を書いてもらえば支払いができることを教えられます。林さんはスーパーでも八百屋でも買物をする自信がきます。

2 練習1 ピンク3のカード 登場人物：林夫妻。

林さんと奥さんは、王さんが帰った後で、日本のお金の種類とその日本語の言い方について復習することになりました。

初めは、奥さんが中国語で1円から順に1円、5円、10円、……と金額を言い、林さんはその金額に合ったお金を指でさす練習をします。次に奥さんが日本語で金額を言い、林さんはそれに合ったお金を取っていく練習をします。林さんは何とか正しくお金を取ることができました。始める前に奥さんが「わたしが金額を言うから、あんたはその金額に合ったお金を取るのよ。」と言っていたので、林さんは「お前がそう言ったのだから、取ったお金は全部おれのだ。」と言い出します。ところが、奥さんに「そんなら、これから買物はみんなあんたに頼みますよ。」と言われ、全部奥さんに返します。

3 練習2 ピンク4のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

また王さんが林さんの家に来てくれました。王さんは、買物の仕方を八百屋の場面を再現して復習するために、林さんの家にある野菜などをテーブルに並べます。「王青果店」の店開きです。

初めは、奥さんが買物をする役となり、ピーマン一山とにんじん4本を買って、「すみません。幾らですか。書いてください。」と言って支払いと釣銭の受け取りができました。次は、林さんが練習をします。

4 単語 ピンク1～4のカードの裏 登場人物：林夫人、佐藤さん。

林夫人が佐藤さんから野菜の名前などを教えてもらいます。「はくさい」、「だいこん」、「ピーマン」、「てんぶら」、「大根おろし」、「カレーライス」、「じゃがいも」、「たまねぎ」、「やさい」、「くだもの」、「くだものや」、「スーパー」の単語を教わります。

林夫人は「はくさい」、「だいこん」、「にんじん」、「ピーマン」の四つはなんとか覚えられそうです。

〔発展へのヒント〕

この課も実際の行動を通じて学習するのが最もよいと思います。買物の実習には次のような段階があります。それぞれの学習者に応じて適当な段階から指導してください。

- ① 指導者は学習者が買いたいと思っている物を聞いて学習者の代わりに買物をします。学習者は指導者についてその様子をよく観察します。
- ② 指導者は学習者が買いたいと思っている物を聞いて、品物の名前と必要量それに「日本語がよく分かりません。よろしくお願いします。」などの言葉を紙に書き、学習者はそれを持って商店に行き、「すみません。これ。」と言って買物をします。指導者は学習者に応じて、手助けをします。
- ③ この課と同じように、スーパーなど言葉をほとんど使わなくてよい店で、学習者に買物をさせて、

指導者は側でそれを助けるようにします。次に八百屋などで買物をします。

- ④ 指導者と学習者が一緒にいろいろな店でいろいろな買物をします。このとき学習者が主となるか、指導者が主となるかはそのときの状況に応じてください。
- ⑤ 指導者が必要な物を学習者に伝えて、行くべき店を教えて買物をしてきてもらいます。このとき、書付を持たせるかどうかなど、学習者に配慮した方法を取ってください。
- ⑥ 学習者が日常の買物をしながらその方法などについて指導者に相談ができるように話しておきます。

家具や電気製品などの高額のもの買物には指導者など、身近な者の同行を頼むように伝えておくことも大切です。

青の課 「どうぞ」「どうも」

ここでは青のラベルのテープと、青1～3、計3枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

中国から帰国したばかりの学習者は、親戚や地元の人、またボランティア関係者等いろいろな方面から招かれる機会が多いと言えます。また、その後は、そうした人たちとの付き合いが深まって、自分の家に招く機会も増えてきます。

帰国者の中には、日本語や日本のマナーを知らないからと言って招待を受けても、しり込みをする人が意外に多いのですが、それは帰国者の持つ中国の文化に由来していると思われます。中国では、客に対する礼義が日本以上に大切にされています。帰国者は中国の文化を持った人たちですから、接待に神経を使うのも当然です。しかし、客のもてなし方は日本も中国も大同小異ですから、言葉が分からなくても基本的な接待はできるはずです。このような理由で対人関係に消極的になってしまうのは非常に残念なことです。

そこで、この課では、日本人の家を訪問する場面を設定し、そこでどのようなことが行われ、どのような言葉がよく出てくるかを学習することが目的です。それによって学習者が不安や緊張を取り除くことができれば、自分から客を招待する自信も生まれてくることでしょう。

〔あらすじ〕

- 1 導入 青1のカード 登場人物：林夫妻、王さん、田中夫人。

ある日曜日、林夫妻は王さんに連れられて、初めて日本人の家（田中家）を訪問します。王さんは、日本語やマナーのことを心配している林夫人を励まします。3人が田中さんの家に着くと、田中さんはにこやかに「どうぞ」と言って中に招きましたが、林夫妻はこの言葉を中国語の「都走^{ドウゾウ}（皆帰れという意味）」と聞き違い、びっくりしています。林夫妻は王さんに尋ねて「都走」が「どうぞ」の聞き違いであったことを知ります。そして、「どうぞ」ということは人に何かを勧めるときに使う言葉で、中国語の「請」とだいたい同じだということを知ります。林夫妻はお茶を勧める田中さんに一言お礼を言いたいのですが、王さんのように「あ

りがとうございます。」とはまだ言うことができません。そこで、王さんは2人にありがとうの簡単な言い方「どうも」を教えます。2人は「どうぞ」「どうも」を覚えるために即興で歌を作り、歌い出します。田中さんもその歌を教えてもらい、一緒に歌います。そして、田中さんは中国語の「請」と「謝謝」を、林夫妻は「どうぞ」と「どうも」をそれぞれ覚えてしまいます。

2 練習1 青2のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

家に帰った林夫妻は、食事中に田中さんの家で覚えた「どうぞ」「どうも」が使えることに気が付きます。まず、作った歌を歌ってもう一度意味を確認し、それから、林さんが客になって、それを夫人が接待するという練習を始めます。まず、林さんが表から声を掛けて、夫人が「どうぞ。」と中に招き入れます。林さんは、手を添えたらどうか等とアドバイスします。次に林夫人は、部屋に迎えた林さんに「どうぞ。」と座布団を勧め、それからお茶を勧めます。この時は単に「どうぞ」だけでなく、田中さんが言ったように「お茶、どうぞ。」と勧めてみます。そのうち、林さんは練習にかこつけて催促したので、夫人はしかたなくビールを勧めます。そこで夫人はお客さん役の林さんに対してお土産を要求します。林さんが「これ、どうぞ。」とお土産を出したところにちょうど王さんがやってきます。二人は今度は王さんを客にして練習しようと考えます。

3 練習2 青3のカード 登場人物：林夫妻、王さん。

林夫妻は王さんを客にして練習を始めます。まず、王さんが表から声をかけます。林さんがドアを開けます。ここでナレーターの声が入り、林さんは何というべきかを学習者に問いかけます。林さんは「どうぞ」と王さんを迎え入れます。次に、林夫人がお茶とお菓子を勧めます。ここでまた問いかけが入り、林夫人の「お茶、どうぞ。」と答えます。今度は、王さんが林夫人に「これ、どうぞ。」と言います。林さんはその意味を考えます。夫人が林さんに答えを教え、お土産をもらったことに気付いた二人は、日本語でお礼を言おうとします。夫人は「どうも。」と礼を言って、王さんの勧めるままに包みを開けます。中には好物のみかんが入っていました。好きな物の名前はすぐ覚えるという夫人はさすがに「みかん」という日本語も知っていました。

4 単語練習 青1～3のカードの裏 登場人物：林夫人、佐藤さん。

林夫人は佐藤さんに物の名前を教えてもらっています。「お茶」、「紅茶」、「コーヒー」、「ビール」、「たばこ」、「お菓子」、「チョコレート」、「ケーキ」、「みかん」、「りんご」、「なし」の11の単語を生活情報を折り返しながら教わりました。林夫人は其中で「みかん」、「ビール」、「お茶」、「お菓子」の四つは何とか覚えました。

〔発展へのヒント〕

この課では、訪問時や来客時の応対に便利な言葉として「どうぞ」と「どうも」を提示しました。その理由は第一に学習者に覚えやすく言いやすいこと、そして第二に不自然さがなく、かなり広い範囲に使えることです。

まず、一緒にテープを聞いてください。学習者がリラックスしていたら、「導入」で林夫妻が経験した出来事について話し合ってみましょう。自分の経験談を話してもいいし、あるいは学習者が自分の体験等を話すかもしれません。雑談していくなかで日本と中国のマナーの比較が出たり、必要なら、訪問時来客時の知識（おじぎ、靴の脱ぎ方、座り方、お茶の入れ方、飲食のマナー、一般的な手土産等）を教えることもできます。ただ、このとき気を付けたいのは、日本式のやり方を学習者に押し付けないこと、強制しないことです。日本式のやり方を知識としては教えても、その日本式のやり方に従うかどうかは学習者の問題です。

日本語の方に興味に移ったら、練習をしてみましょう。練習といっても、いかにも勉強という雰囲気ではなく、例えば、ビールやグラス、急須や湯呑み、お菓子等を用意して、「練習2」のテープのように「どうぞ。」と言いながらいろいろな物を勧め合うのもいいでしょう。このとき、必要なら、自然なおじぎの感じや手の添え方等も練習できます。「どうぞ」は中国語の「都走」との関係が面白いので覚えやすいでしょう。余裕があれば「お茶、どうぞ。」を練習してもよいですが、勧めるものすべてにいちいち「お菓子、どうぞ。」「座布団、どうぞ。」等と名詞を付けるのは押し付けがましく、かえって聞き苦しいので気を付けてください。

学習者が練習を続けられれば、接待する側、される側両方の立場を練習させてもいいです。さらに慣れれば「練習1」のテープのように学習者同士での練習もできます。

しかし、何といっても一番よい練習になるのは実際場で使ってみることです。たとえば学習者と一緒に知人の家などを実際に訪問して、日本人同士の会話を聞き取らせたり、学習者が自信を持っていれば「どうぞ」「どうも」を使う場を作ってあげましょう。

更に、この「どうぞ」「どうも」は、例えば、何かを貸してあげるとき、席を譲るとき等、他のいろいろな場面でも応用できるでしょう。

紫の課 数の数え方（1～10）、曜日の言い方。

「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」「さようなら」。

「お父さん」「お母さん」「主人です」「家内です」。

この課では紫のラベルのテープと、紫1～4、計2枚のカードを使用します。

〔この課のねらい〕

この課では、数（1～10）や曜日など言葉の学習の上で初期の段階にどうしても覚えなければならない項目を取り上げてあります。

数などは1から10までをそれぞればらばらに覚えるのは効率的ではありません。しかし、学習に慣れていない人たちに1から10までをただ暗記せよと言ってもなかなか覚えられないものではありません。覚えるためには、何らかのきっかけが必要です。ここでは、語呂合わせや歌のところで、楽しく覚えられるように工夫しました。

歌は、まず楽しく何度も聞いて自然に覚えることが大切で、決して強制的に歌わせたりするためのものではありません。次の段階としては数や曜日の言葉が歌でなくても聞いて理解できるようになれば成功です。自分で言えるようになるには、人によって時間がかかなり必要かも知れませんが、楽しく覚える工夫さえできれば必ず言えるようになるはずです。

数の数え方(1～10)

ここでは、紫のラベルのテープと、紫1のカードを使用します。

〔この項目のねらい〕

林さんは日本社会で生活していく上で日本語が覚えられないと何もできないと嘆きます。しかし、言葉ができないと生活できないという考え方は学習者にとって有益ではありません。むしろ中国での生活体験を活かして日本で生活し、社会参加していくことによって日本語や日本のルールなどを少しずつ覚えることができるのです。「言葉を完全に覚えられないと何もできない。」と言う林さんに対し、何かをするからこそ言葉が覚えられるんだと諭す王さんの先輩としてのアドバイスは貴重なものと思われます。

ここでは、林さんは日本語の1～10の言い方を覚えます。数の数え方は、日常の行動をする上で応用範囲が広いものです。特に買物には役立ちます。(ピンクの課を参照してください。)

とはいっても、一度に日本語の数を体系的に覚えることは容易なことではありません。まして、助数詞がついた「～個」、「～本」、「～杯」などはこの段階で指導することは避けるべきです。まず初めには、ここでのように1～10だけを導入するくらいが限度でしょう。それも、学習者によっては聞き取りを中心にした練習にするなど負担を感じさせないように指導する配慮が必要です。

1～10の数を覚えただけでも、それが実際の日本での生活に幅をもたせます。その幅をさらに言葉を覚えるきっかけにつなげていきたいものです。

〔あらすじ〕

登場人物：林夫妻、王夫妻。

林さんは王さんの家に遊びに来ています。王さんは日本語の1～10の言い方を教えます。林さんはそれを中国語の「舅一氣你，山西狗老哭吸氣哈氣哭。」(叔父さんがお前を叱ったんで、山西の犬はキャンキャン鳴いているんだ。)と聞き違えてしまいます。林さんはこの聞き違いがきっかけになって日本語の1～10の言い方を覚えてしまいます。

覚えた数の言い方をつぶやきながら家に帰ると、ちょうど林夫人も、お母さんから1～10の言い方を教わったところだと言われ、その言い方を聞きます。すると、4, 7, 9の言い方が林さんが覚えたのと違います。4は「し」、「よん」、7は「しち」、「なな」、9は「く」、「きゅう」の両方の言い方があると奥さんに言われ、林さんは調子をつけて唱えながら覚えようとします。

曜日の言い方

ここでは、紫のラベルのテープと、紫2のカード(紫1のカードの裏)を使用します。

〔この項目のねらい〕

中国の曜日の言い方は、日曜日を「星期天」、月曜日から土曜日を「星期一、星期二、…星期六」というように日本とは異なっています。帰国者にとって日本の曜日の言い方は、覚えやすいものではありません。

しかし、曜日の言い方は生活の中でよく話題になります。仕事や学校が週単位で繰り返されるだけではなく、人との約束や商店の休日、電車やバスの運行など日常の生活が曜日と深くかかわっています。

ここでは、日本語での曜日の言い方に慣れ、聞いて理解できることを主なねらいとしています。

〔あらすじ〕

登場人物：林さん、王さん。

林さんは王さんに曜日の言い方を尋ねますが、中国語と違って数字を使わないので、せっかく覚えた数字が使えずがっかりして、覚える気をなくしてしまいます。王さんに励まされて、王さんの後について何とか言えるようになりましたが、やはり覚え切れません。そこで、林夫人に曜日の歌を作ってもらって毎日歌うことにしました。

日本語のあいさつ：おはようございます。こんにちは。こんばんは。さようなら

ここでは、紫のラベルのテープと、紫3のカードを使用します。

〔この項目のねらい〕

日本語は中国語に比べあいさつなどの表現が多いようです。それは日本社会では人間関係を保っていく上でこれらの表現が重要だということを示しています。しかし、重要だからといって、帰国後間もない学習者に日本でどのあいさつ表現などをすべて要求するのは無理があります。ここでは、標題に示したように四つの表現だけを導入します。学習者によってはこのうち一つでも覚えればよいとすべきでしょう。この段階では、あいさつ表現などが使えるかどうかよりも、日本社会ではあいさつをよくするということを理解させることに重点をおくべきでしょう。

〔あらすじ〕

登場人物：林さん、王夫妻、その他。

林さんは、昨日王さんの家に遊びに来て昨晩は泊まりました。朝早く散歩に出掛けようと玄関から外に出ると、ちょうど新聞配達がやって来て、「おはようございます。」と言って新聞を林さんに手渡します。林さんは何のことだか分からずそのことを王さんに報告をします。王さんからそれが新聞配達だと知らされ、「おはようございます。」はあいさつの言葉だと教えられます。

林さんは夕方になって王さんの家から帰りますが、自分のうちの近くの路上で近所の山田さんの奥さんに会います。林さんは思い切って覚えてばかりのあいさつ言葉「おはようございます。」を使いますが、山田さんに変な顔をされてしまいます。

そこで林さんは、翌日王さんの家に行って王さんがうそを教えたのではないかと責め立てます。ところが、「おはようございます。」は朝のあいさつで、午後や夜は「こんにちは。」「こんばんは。」と言い、人と別れるときは「さようなら。」と言うことを知らされます。これらの表現を使い分けなければならぬと言われ、難しいと嘆きます。しかし、王夫人からこれらあいさつ表現を覚えるための歌を教わり、気を取り直します。

おとうさん。おかあさん。主人です。家内です。

ここでは、紫のラベルのテープと、紫4のカード（紫3のカードの裏）を使います。

〔この項目のねらい〕

あいさつと同じように呼び掛けも人間との関係を作り上げるのに不可欠の要素です。ここでは、「おとうさん。」「おかあさん。」という呼び掛けの言葉を導入します。学習者が興味を持った、あるいはどうしても必要だと思われる場合は、その他の親族呼称（おねえさん、おにいさん、おばあさん、おじいさんなど）も教えてもいいでしょう。

後半では日本人に自分の配偶者を紹介する表現を扱いますが、これも日本人との人間関係を広げる意味で重要です。

〔あらすじ〕

登場人物：林夫妻、その他。

歌で「おとうさん、おかあさん」を導入したあと、ナレーションがその意味を解説します。

もう一つの歌では、林さんが自分の知人である田中さんに妻を「家内です。」と紹介し、林夫人が自分の知人である佐藤さんに夫を「主人です。」と紹介します。その後再びナレーションが説明を加えます。

単語総合練習

ここでは白いラベルのテープと、両面に各々色の違う三つの箱のある縁どりのない絵カード1枚を使います。

〔練習のねらい〕

言葉を学習する最初の段階においては文型や表現よりも単語の方が意志疎通に果たす役割が大きいことは私たち自身の経験に照らしても明らかです。さらに、学習に慣れていない学習者でも身近な物の名を具体的なイメージとともに覚えることは(単語の数が多すぎなければ)むしろ楽しいことですし、学習の満足感を与えてくれます。この練習に触発されて、自分の回りにある様々な物を日本語で何と言うのだろうと学習者が興味を持ってくればいいのです。ですから、ここにある単語をすべて覚える必要もありませんし、まして短時間で覚える必要など全くありません。テープの中で同じ単語を何度もくり返しますから何か家事をしながら、仕事をしながら、気楽にこのテープを流しておく、というのでかまいません。指導者には、とにかく単語を覚えることが苦痛にならず楽しくできるようにしてやることをお願いします。

また、この練習は基本的には課ごとに単語がまとめられていますから、例えば青の課を終えた後で学習者をもっと単語の練習がしたいということがあれば、白1の絵カードの、青の箱の部分だけを開いて練習することもできます。青の課の単語は白いテープの一番最初にありますからすぐ見わかりますが、他の色の課の場合はテープのその箇所を捜さなければなりません。その際には多分指導者の助けが必要です。同じ箇所を繰り返し聞きたい時も同じです。

〔あらすじ〕

各々の箱の中に八つの絵または写真があります。単語としては四つですが、各々2回ずつ出てきます。ナレーターが八つの絵または写真について1番から順に日本語で何と言うか覚えているか、などと学習者に直接問いかけていきます。そのあとナレーターが答えを出し、日本人がその単語を3回、適当な間をおいて繰り返します。青の箱の次は黄色の箱へという順で、六つの箱について同じことを繰り返していきます。

〔 3 〕 この教材を日本語教室等で使う場合

この教材は、日本語学習の困難な帰国者がそれぞれ自分に合ったペースで日本語に慣れ親しんでいくために作られたものです。その意味で、「勉強」を中心の機能とする学校や日本語教室でこの教材を使う場合には、いくつか注意しなければならないことがあります。

(1) 日本語教室等で数人の日本語学習が困難な帰国者がいて一つのクラスを作る場合

一つのクラスのなかに、習得の早い学習者と遅い学習者が混在することは、とくに後者にとって望ましいことではありません。落ちこぼれかかっている学習者が何をやっているのかほとんど分かっていないクラスにいて、しかも学習意欲を持続させるのはとても難しいことです。そのようなクラスでは、習得の遅いものは早いものに対して劣等感を抱きやすく、それがまた日本語に対する恐れを助長する結果になります。その場合、とくに日本語学習の困難なものが複数いる場合には、できるだけその人たちを集めて一つのクラスを作らなければなりません。

このようなクラスでは、この教材をそのクラスの主教材として使用することができます。その場合には、この指導書〔1〕の第3節、4節の解説を参照にして、指導計画を作ってください。指導者が中国語に自信がない場合には、4節の「中国語に自信がない場合」の解説を利用してください。

この教材をクラスで使う場合の注意は、学習者の間に競争意識を持たせないことです。Aさんは単語をいくつ覚えたけれど、Bさんはまだ覚えていないなどということを学習者に感じさせるような雰囲気を作ることは絶対に避けなければなりません。指導者は、このクラスでは、学習者に勉強をさせることよりも、学習者同士がお互いに助け合って、楽しく遊ぶ場を作り出すことに全力をあげてください。そうした雰囲気ができさえすればあとは指導者は話し相手としてその場にいるだけで十分です。

(2) クラスの中で補助教材として使う場合

教室等の中に、この教材の本来の対象者である学習者がいない場合でも、学習初期の補助教材としてこの教材を使うことができます。たとえば、この教材で取り上げられている表現を教える時間に、その導入としてこの教材のテープを聞かせることは、学習の動機付けとして非常に有効な利用法です。

またコースの中での息抜きの意味で、ときどきこの教材のテープを聞かせることもできます。困難な日本語学習の途中で、中国語の楽しい雑談を聞かせるようなつもりでこの教材を利用することは、学習者にとって絶好の息抜きの機会を与えることになるはずです。

(3) 新しく入ってきた学習者の待機期間に利用する場合

教室等では、コースの途中で帰国直後の学習者が入学を希望してくることがあります。そのような場合、新しいコースが始まるまで入学希望者を待機させたり、教室に來させても一時的に指導者が付かず自習させる必要が出てきます。この教材は、そのような学習者のための自習教材として利用することができます。その場合には、指導者はまず、テープレコーダーの使用法を確実に指導してください。

中国引揚者日本語教材編集委員会委員

(5 0 音順)

池 上 摩 希 子	中国帰国孤児定着促進センター 日本語講師
梅 田 康 子	中国帰国孤児定着促進センター 日本語講師
田 中 望	国立国語研究所日本語教育センター 日本語教育指導普及部日本語教育研修室長
(主査) 水 谷 修	名古屋大学教授
古 川 ちかし	国立国語研究所日本語教育センター 日本語教育指導普及部日本語教育研修室研究

この教材のテープ録音用和文原稿とテープ録音指導は編集委員及び張清華氏がそれぞれ分担し、中国語訳は張清華氏にお願いした。テープ録音のナレーター、出演者は、荒井雅子、王 学林、岸田登美子、高原洋子、張 清華、懂英、劉 守文、吉崎恒子氏に、音楽は吉崎恒子氏、写真撮影は行方克巳氏、イラストは山内譲二氏、下村賢二氏にそれぞれお願いした。また、教材の編集、整理は、上記編集委員と国語課の山田 泉、川村隆造、多 昭彦が担当した。

中国からの帰国者のための
看 ・ 听 ・ 学

—— はじめての日本語 ——

指導に当たる方へ

平成21年12月10日 発 行

編集・発行 文 化 庁（文化部国語課）
〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関3-2-2
電話 5253-4111（代表）

印 刷 株式会社 騰 栄 社
〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-12
電話 03(3294)6385（代表）
